

[HOME](#)

## 世界貿易センターの悲劇：犠牲者追悼

橋本努

2003.9.

二〇〇一年九月十一日、「世界同時多発テロ事件」と呼ばれるあの惨事において、ニューヨークの世界貿易センタービルでは、いかなる事態が生じていたのであろうか。最初の旅客機が北タワーに激突してから、二つのビルが全壊するまでに要した時間は、一時間四二分。ビルの内部にいた人びとは、あのとき何を感じ、そしてどのように行動したのか。テロ事件から八か月がすぎて、ニューヨーク・タイムズ社にはさまざまな情報が集められた。ここではその情報を元に、世界貿易センターが崩壊するまでの一〇二分を再現してみよう。テロ事件の犠牲者たちに対して、私はこの悲劇を書き留めることで、哀悼の意を表したい。

\*\*\*

忘れもしない、あの日に起きたことは、二機の旅客機の突入による二棟の高層ビルの崩壊という大惨事である。

最初の旅客機が突っ込んだのは、午前八時四六分、北タワーの九一階付近であった。その破片は爆発によって九八階にまで達し、また旅客機の離陸・着陸用のタイヤは、五ブロック先のレクター・ストリートに落ちた。

しかし三フロア下のスティーヴ・マッキンタイア氏のオフィスでは、衝突の直後には何の異変も起こらなかった。本棚に飾ってあるスナップ写真が床に落ちることもなかった。マッキンタイア氏は、自分のコンピューターの状態がまだ正常であることに気づいたという。だがその後、大きな揺れを経験する。三秒から四秒で一方向に揺れ、そして今度は反対の方向に揺れもどる。まるで嵐の中で、巨大なボートに乗っているかのような状態だったという。

造船技術に携わる公務員グレッグ・シャーク氏は、マッキンタイア氏のオフィスの外に立っていた。彼は自分を奮い立たせて、「われわれはここから出て地獄に行かねばならない」と叫んでいた。シャーク氏とマッキンタイア氏の二人は、非常階段を目指した。しかし階段は石膏ボードで塞がれており、また二つの非常出口はさらに状態が悪かった。だが彼らはついに抜け道を探し出して、九一階から降りてきた人々と合流し、無事に生還を果たしている。

その一方で、衝撃によって非常階段のドアが捻じ曲がったり、剥がれた石膏ボードで塞がれたりして、抜け出すことができなかった人も多い。もしハンマーでもあれば、抜け出せたかもしれない。実際、北タワーの八六階では、ポート・オーソリティーから駆けつけた数人

の救助隊が、歪んだドアをこじ開けることに成功し、少なくとも二八人が助けられている。だが駆けつけた救助隊員たちは、ついに帰らぬ人となってしまった。

北タワーの九二階では、カール・フューチャー社の社員たちが非常階段を探していた。同じ階にいたダミアン・ミーハンは、ブロンクスで消防員をしている弟のオイゲンに電話をかけている。「本当に最悪だ、エレベーターが使えない」。オイゲン氏はビルの中に閉じ込められた兄に、「近くのドアに行ってみて、煙があるかどうか調べて」「階段に行ってみて、どこから煙が来ているのかを見て、そして別の道を探して!」と伝えた。「私たちはこれから行く」とダミアンは答えた。しかしオイゲンにとって、これが兄からの最後の言葉となってしまった。

北タワーの一〇六階では、レストラン経営者のドリス・エングさんが、消防指令センターに電話をかけていた。「いったい私たちは何をすればいいの?何をすればいいの?」何度も同じ質問を繰り返した。飛行機が衝突した直後から、そのレストランには煙が充満し、ドリスさんは百七〇人の客の対応におわれていた。レストランでは、情報収集に長けたビジネスマンたちが朝食をとっていた。しかし煙が充満するにつれて、彼らは何もできず、何が起こったのかも分からず、断片的な情報に対してただ叫び声をあげるのみだった。朝の会議に出席していたコンピューター科学者のトンプセット氏は、「ブラックベリー・コミュニケーター」を使って、妻にEメールを送信している。「CNNを見てくれ。情報をアップデートしなければならない。」

煙の中でラジェシュ・ミアプリ氏は、彼の会社データ・シナプス社に電話した。咳き込みながら彼は、「三メートル先までしか見えない」とボスに伝えた。ブルムバーグ社のセールスマンであるピーター・アルダーマン氏もまた、彼の姉妹にEメールを使って「怖い」と伝えている。

ドリスさんとそのスタッフたちは、緊急避難訓練に従って、一〇七階にいる人々を一つ下の一〇六階へと誘導した。そこには、消防指令センターへの直通電話があった。火災が生じた際に彼が取るべき行動は、その階と一つ上の階にいる人々を、何らかの方法で避難させることであった。だが経営者とスタッフは、指令センターから指示があるまで、あるいは状況が強くなるまで、避難してはならないということになっていた。飛行機が衝突してから二〇分後、レストランのアシスタントをしていたクリスティーン・オレンダーさんは、総支配人のグレン・ヴォグト氏の自宅に電話をかけている。「脱出方法については何も知らされていない。天井が落ちてくる。床が崩れ落ちていく!」

ビルの上層部が煙で覆われていて、警察のヘリコプターは、屋上に着地できなかった。しかしそれでも人びとは、救援を求める声をあげていた。レストランで働いていたイヴハン・カーピオ氏は、彼の従兄弟の留守電にメッセージを残している。「彼らが私たちに『動くな』というから、私はどこにも動けないんだ。消防士たちを待つほかない。」

しかし消防士たちは、どのような対応をしてよいか分からなかった。誰もこのような高層ビルでの火災を経験したことがない。世界貿易センタービルのロビーにいた消防員の指揮官たちも、どの非常階段が使えるのかを把握できなかった。エレベーターはすべて停止し

ていたので、消防士たちは重い装備を背負って階段を駆け上がるほかなかった。最初の旅客機が衝突してから一時間後、消防員たちはようやく五〇階までたどり着いた。ロビーでは、指令官たちが上階にいる消防員たちから連絡を受けていたが、指揮官のアラン・リース氏は、「濡れたタオルを入手して、それを顔にあてろ」という指令しか出せなかった。だが上階では水道管が破損しており、ウェイターのマシジェウスキ氏は、「布切れを濡らすための水がない。花瓶の水がないかどうか探してみる」、と携帯電話で妻に伝えている。水がなく、そして空気も十分でない上階では、携帯電話とブラックベリー・システムによるEメールの送受信のみが可能であった。レストランでは、それらの手段を使って、少なくとも四一人の人々が外部と連絡をとっている。イマジン・ソフトウェア社のピーター・マーディカン氏は、妻のコリンさんに、壊れた天井を上へ向かって突き進んでいるという状況を伝えた。多くの人々は、有効に使える数少ない携帯電話を順番に利用した。フィーニー氏は、フロリダの母親にこう言った。「ママ、僕はおしゃべりするために電話しているんじゃないんだ。いま世界貿易センターにいて、ここに飛行機が突っ込んでしまったんだよ。」

レストランの監督者ローリー・ケーンさんから連絡を受けた夫のハワード氏は、電話の最中に受話器の向こうで、誰かが「私たちは閉じ込められたのだ」と叫んでいるのを聞いたという。ある会議に出席していたガブリエラ・ワイズマンさんは、十一分間のあいだに彼女の姉妹と一〇回の電話を交わした。レストランの集金管理人であるベロニク・ボウワーさんはとても混乱していて、彼女の祖母に「ビルが救急車に追突された」と伝えている。

\*\*\*

北タワーの一〇四階にあるカンター・フィッツジェラルド社の会議室では、悪夢はゆっくりと忍び寄った。一〇六階のレストランほですぐに煙は蔓延せず、一階下のマーシュ&マクレナン社ほど速く火災に巻き込まれることもなかった。会議室は東側に面しており、エンパイア・ステート・ビルを望む壮観なスペースであったという。カンター社の株式トレーダーであるアンドリュー・ローゼンブラム氏は、社員たちの家族を安心させるために、妻のジルに、社員全員の自宅の電話番号を伝えようと考えた。ジルさんは、四〇人から五〇人の電話番号をノートに走り書きした。そしてアンドリュー氏は妻に、「この電話番号に電話して、社員の伴侶たちに、『会議に出席している私たちはみな元気だ』と伝えてくれ」と頼んだ。

ジル夫人は、そのとき彼女の家を訪れていた人たちにメモを見せることにした。するとそこに居合わせたデビー・コーエンさんは、ジル夫人が書き留めたメモを元に、社員たちの自宅に電話をかけ始めた。「こんにちは。あなたは私を知らないでしょうけれど、私は世界貿易センターにいるある人からあなたの番号を受け取りました。約五〇人が角の会議室にいて、彼によれば、いまのところみな大丈夫だということです。」

一〇五階のカンター社では、商品ブローカーのマイク・ペレティエ氏が、妻のソフィーさんと電話で話すことができた。そのとき妻の友人が、飛行機の衝突がテロリストの仕業であ

ることを伝えると、ペレティエ氏はその場で、同僚たちに向かってその旨を叫んだという。

イリアナ・マクギンス夫人は、北タワーの九二階にいた夫のトムから電話で連絡を受けた。「いまいったい何が起きているのかについて、もし誰かがもう一つでも情報を明らかにしてくれるなら、私はそれを知りたい。」

また別の男性は、Eメールを通じて、「(ビルの) 外から何か情報はないのか？」というメッセージを発信している。

\*\*\*

南タワーにあるエイオン保険会社で働いていたシーン・ルーニー氏は、妻のベヴァリー・エッカートさんのために留守電にメッセージを残している。「おい、ベヴァリー！ 世界貿易センターの第一ビルが燃えているんだ。隣のビルだよ。飛行機が突っ込んだようで、九〇階くらいかな。火災が起きている。す、す、すごいことになっているよ。じゃあね。」

南タワーにいても、北タワーの火災の熱が感じられたという。多くの人々は避難をはじめたが、しかしビル全体のアナウンス放送では、「外に出てケガをするよりも、ビルの内部にいるほうが安全だから、待機するように」、という指示があった。ルーニー氏は、妻のベヴァリーさんに二つ目の留守電メッセージを残した。「条件がよければ、これから冷静に避難することになると思う。また後で電話するよ。」ルーニー氏がこのように話しているちょうどそのとき、南タワーには、テロリストたちに乗っ取られた第二の旅客機が衝突した。九時〇二分のことである。

富士銀行（合併して現在はみずほ銀行）で働いていたスタンレー・プライムナス氏は、南タワーに旅客機が衝突する前に避難を始め、すでにエレベーターで一階のロビーまでたどり着いていた。しかしロビーではガードマンたちが、避難する人々に対して職場に戻るよう指示を出していた。これに従ったスタンレー氏は、彼のデスクに戻る途中で、窓の外の地平線に灰色の小さな物体を見たという。それは自由の女神を越えて、彼のいるビルへと向かってきた。物体はだんだん大きくなり、アメリカン航空の飛行機だということが判別できた。側面に赤いストライプが見えると、その機体はスタンレー氏のいたフロアを直撃した。彼のデスクの五メートル先に、それは突っ込んできたのである。

胴体は炎上し、鉄とアルミニウムの破片が飛び散った。突風がコンピューターや机や窓を破壊して、電気系統を引き裂いた。机の下に身体を丸めたスタンレー氏は、彼の部屋のドアに刺さったアルミニウムの破片が輝いているのを見たという。

衝突した飛行機の残骸は、南タワーの七八階から八二階にまで達していた。八四階にあるユーロ・ブローカーズ社のオフィスは、ほぼ壊滅状態となっていた。しかしそれでも、そこから生還した人たちがいる。ロバート・コール氏、デイヴ・ヴェラ氏、ロナルド・ディフランシスコ氏、ケヴィン・ヨーク氏らである。八四階の防災管理人であるブライアン・クラーク氏は、懐中電灯とホイッスルを持って、彼らを近くの非常階段へと誘導していた。非常階

段には細かい塵と煙が充満していたが、それでも階段を降りることができた。しかし彼らが八一階に近づいたとき、やせた男性とずんぐりした女性に会った。「下には行けない。上に行かなければならない。」下の階は、煙と火災がひどかったのである。

この言葉がすべてを変えてしまった。階段にひしめき合う何百もの人びとが同じ判断を下し、上へ避難してしまった。しかし実際、たちこめる煙は、人々が恐れるほどの障害ではなかった。この非常階段は、階下へたどり着くための唯一の通路であった。ここを早く抜けた人たちのみが、地上へ生還することができたのである。

ブライアン・クラーク氏は、そこに居合わせたユーロ・ブローカーズの社員たちと「上に行くか下に行くか」を議論していた。すると、八一階から「助けて!」と叫ぶ声が聞こえてきた。「私は閉じ込められてしまった。私をここに置き去りにしないでくれ!」それは富士銀行で働くプライムナス氏の声であった。そこで彼らは議論を止めて、各人が、上か下へいくことを判断したという。コール氏とヨーク氏とヴェラ氏は、ずんぐりした女性とやせた男性とともに、上へ向かった。ヨーク氏とコール氏は、その女性の両腕を支えて手助けした。「さあ、あなただって避難できるよ。私たちは皆いっしょだ。」

これに対してクラーク氏とディフランシスコ氏は、助けを求める声の方へ向かった。プライムナス氏は懐中電灯の光線を目に留め、そちらの方向に這って行った。クラーク氏とのあいだには大きな壁が立ちはだかっていたが、彼らは両手を使って、そこに穴を開けた。すでに左手と左足にそれぞれ重傷を負っていたプライムナス氏であったが、ついにその壁をジャンプして越えることに成功する。そして彼らは煙の中を下へ向かった。南タワーに旅客機が衝突してから約三〇分後、非常階段に充満していた煙や塵は少なくなっていたのかもしれない。

この間、ディフランシスコ氏は、よい空気を求めて上のフロアへと向かっていた。約一〇階分ほど非常階段を上ったところで、人びとの集団に出くわした。彼らはしかし、非常階段の外側に出入れず、ひどい煙の中で消耗しており、その場に横たわって眠り始めていた。ディフランシスコ氏はその光景を前に、「私はもう一度、妻と子供の顔が見たい」と奮起して、階段を駆け下りていった。南タワーの非常階段は分散していたので、旅客機が衝突した後も、ビルの周囲に位置する二つの非常階段を利用することができた。南タワーでは少なくとも、上層のフロアにいた一八人の男女が、この階段を使って生還している。

\*\*\*

南タワーの七八階にいた人々は、ビルを下って避難すべきか、それとも職場に留まるべきかを決めかねていた。するとそのとき、第二の旅客機が南タワーに突っ込んできたのである。天井も壁も窓もキオスクも、さらにエレベーターの大理石までも破壊されてしまった。

閃光と熱風と衝撃波によって、すべてが崩壊しつくされてしまった。最初の衝撃から十六分間に起きたことは、まさにパニックである。フロアの中心部とエレベーターのシャフト

に炎が上がった。ロビーにいたマリー・ジョスさんはその黒い煙に巻き込まれ、背中と顔には火が燃えうつった。彼女はとにかくそれをもみ消そうとしたが、ついに意識不明となって倒れてしまった。

人びとは第二の旅客機が衝突する前に、なぜ避難しなかったのだろうか。ビルの内部で人びとは、「外よりも内部のほうが安全だ」というアナウンスによって安堵させられる一方で、「やはり外のほうが安全に違いない」という不安を抱いていた。キーフ・ブルイエット&ウッズ社では、投資部門で働いていた人々はほぼ全員脱出することができたのに対して、普通株のトレーダーたちは職場に留まり、そして結局亡くなった。その中の一人ステファン・マルダリー氏は、北タワーが燃えているのを窓越しに見たときに、兄弟のピーターへ電話をかけている。「南タワーは安全だというし、私は職場に向かわなければならない。電話が鳴っているし、市場も開くだろうから。」

第一の旅客機が衝突してから第二の旅客機が衝突するまでのあいだ、快速エレベーターが止まる南タワーの七八階では、人びとは、上のオフィスに戻るべきかそれとも下に避難するべきかについて迷っていた。一〇〇階にあるエイオン・コーポレーション社の社員、ケリー・レイハー氏は、上りのエレベーターに乗った。同社のジュディ・ウェインさんとジジ・シンガーさんは、文庫本を取りに戻ろうと思ったが、ボスのハワード・ケステンバーム氏は彼女たちに、「帰宅するためのバス賃をあげるから、文庫本のことは忘れなさい」と諭した。

ところが南タワーに旅客機が衝突すると、ウェインさんの体はひどい衝撃を受けてしまった。右手が折れ、あばら骨が三つ折れて、右の肺の機能が止まってしまった。ある意味で彼女は、幸運であった。というのも彼女の周りにいた人々は、ほとんど死んでしまったからである。ウェインさんは、彼女のボスのケステンバーム氏を見つけると、彼は呆然として、動かず、何も話せなかったという。エイオン社の同僚であるリチャード・ガブリエル氏は、落ちてきた大理石に足をはさまれてしまった。ウェインさんはその石を取り除こうとしたが、ガブリエル氏はその痛みから泣き叫び、彼女に「もう諦めて」と告げた。

エレベーターにとじ込められていたケリー・レイハー氏は、彼のブリーフケースを使って、何とかエレベーターのドアをこじ開けて外に出ることができた。するとそこには、ドナ・スパイラさんがいた。彼女の腕は折れて、髪の毛は焼け焦げていたが、それでも彼女は歩くことができた。

そこに、ある男が現われた。彼は口と鼻を赤いハンカチで覆い、消火器を探していた。ジュディ・ウェインさんによると、彼はそのとき、人びとに非常階段の位置を指し示して、多くの命を救ったという。「歩ける人は、さあ起き上がってこちらへ向かってください。誰かを助けることができる人は、誰かを探して助けて、そしてこの階段を下ってください。」

リン・ヤングさんもまた、この七八階のスカイ・ロビーから生還した人のひとりである。彼女もその男性に誘導された。ヤングさんによれば、彼女が非常階段を下っていると、その男性は背中に女性を担いでおり、その女性を空気のきれいな階まで運ぶと、また上のフロアへ戻っていったという。

助からなかった人もいる。パラムソシー氏は重症で起き上がれず、その場に残された。ヤングさんによれば、税務署から来ていたサンカラ・ヴェラムリさんとダイアン・アーバンさんは、二人の同僚である重症のダイアン・グラッドストーンさんとイェシャヴァント・テンベさんを助けるために、その場にとどまり、死を迎えた。

\*\*\*

九時三五分、北タワーの上部では、新鮮な空気を求めて窓から身を乗り出している人たちがいた。そのうち二人の男たちは、柱を一つ挟んで、窓越しにお互いを確認していた、ということが、写真やビデオの記録に残されている。一〇三階では、壊れた窓の枠に、片手でぶら下がっている男がいる。彼は、もう一方の腕で、女性を抱えている。地上に落ちないように、彼女を支えていたのであろう。ヘリコプターに乗っていた警察官は、次のように報告している。「上部の五つのフロアでは、割れていない窓の内側に、絶望した人びとが五〇人くらい詰めかけている。彼らは顔を窓に押しつけて、なんとかして空気を吸おうとしている。」

北タワーでは、少なくとも三七人（あるいはおそらく五〇人以上）の人々が、ビルから飛び降りたことが確認されている。南タワーではしかし、二〇人のビデオ撮影者（プロとアマの両方）たちが撮った映像を総合してみても、だれも飛び降りた人はいないようである。

一〇四階にあるカンター・フィッツジェラルド社と、その上の階にあるレストランでは、最後の瞬間を迎えていた。一〇一階から一〇七階までのフロアにいた人々、約九百人すべてが、亡くなったと考えられる。データ・シナプス社の副社長であるスチュアート・リー氏は、グリニッジ・ヴィレッジにある彼のオフィスにEメールを送信した。「すべての場所が煙に包まれている。いま、窓を割るべきかどうかについて、みんなで議論している。」しばらくした後、リー氏は「いまのところ合意はノーだ」と送信した。

しかしそれからすぐに、十数人の人々がレストランの西側の窓を割って、窓の外に姿を見せた。地上にいたレストランの総支配人のヴォグト氏は、煙の中で彼らの輪郭が地上から確認できたという。一〇四階の北西側にある会議室では、アンドリュー・ローゼンブラム氏を含む五〇人の人びとが、ジャケットをつかっただけで煙と火を塞ぎ、コンピューターを投げて窓ガラスを割ることに成功した。しかし結局、逃れる場所はなかった。それまでは超然としていたローゼンブラム氏までも、携帯電話で妻のジルと話している最中に叫び出した。「なんてことだ!」会議室の窓から、人びとが飛び降り始めていたのである。

\*\*\*

南タワーの九七階では、ますます煙と熱気が耐え難くなる中で、エドガー・エメリー氏はデスクの上に立って、彼のブレーザーコートを使って、換気口から噴き出す煙をくい止めようとしていた。彼がデスクから滑り落ちたとき、フィデューシャリー・トラスト社の人材部

の部長であるアライン・ジェントウルさんが叫んだ。「エドガーさん、気をつけて！」エメリー氏は彼女の同僚であり、二人は社員たちを避難させるために、自分たちのオフィスがある九〇階から九七階に上ってきたのであった。彼らはいまや、深刻な事態に巻き込まれていた。ジェントウルさんはそこで何が起きているのかを夫に電話で伝えている。エメリー氏が換気口をコートで包み、靴を振り回してスプリンクラーの栓をこじ開けようとしたが、水は出なかった。ジェントウルさんは夫に、「下に行って炎に巻き込まれたくない」と告げた。電話でのやり取りなどを総合すると、このとき多くの人々は、同僚や見知らぬ人たちに手を差し伸べることを止めたようだ。しかしジェントウルさんとエメリー氏は、社員たちを助けるために、上のフロアを目指した。

エメリー氏のオフィスがあった九〇階では、その西側に機体が突っ込んで、火災が生じていた。同じ階で働いていたアン・フディムさんは「顔に熱を感じた」という。そこにエメリー氏がやってくると、「さあ行こう」と言って、五人の社員を非常階段へと誘導してくれた。快速エレベーターの止まる七八階まで階段を下ると、エメリー氏は、化学療法を受けたばかりで疲れきっていたフディムさんに、こう告げた。「もしすべての化学療法を終わらせる意志があるなら、あなたはここを降りることができるよ。」エメリー氏はフディムさんたちをエレベーターに押し込んで、自分は乗らずに、ジェントウルさんといっしょに上へ向かった。

ジェントウルさんとエメリー氏は、コンピューターのバックアップをしていた六人の人々を避難させるために、九七階へと向かった。エメリー氏の携帯電話が妻のエリザベスさんにつながったとき、彼は九七階で非常階段を探していた。エリザベスさんが最後に受信した言葉は、エメリー氏の近くにいたジェントウルさんの叫びであった。「階段はどこ？階段はどこ？」

その近くでは、フィデューシャリー社の技官であるエドムンド・マクナリー氏が、携帯電話で妻のリズさんと連絡をとっていた。するとフロアの床が崩れ落ち、マクナリー氏は慌てて人命救助対策と被雇用者へのボーナス計画について話し出した。妻のリズさんによると、彼はもう最期だと思い、別れの言葉を告げたという。「君は僕にとって何よりも大切だ。君を愛している」。

それから、リズさんの電話がまた鳴って、夫のマクナリー氏は、ためらいがちに次のように告げた。「リズ、きみの四〇歳の誕生日のために、ローマ行きの旅行を予約したんだけど、それをキャンセルしなければならないよ。」

九三階では、エイオン社の保険ブローカーであるグレゴリー・ミラノヴィッツ氏（二五歳）がいた。彼は周囲の人々に避難を勧めて、自分だけはビルのアナウンスにしたがって職場に戻っていた。彼は父のジョセフに電話をして、「いったいどうして僕はアナウンスに従ってしまったんだろう。従うべきではなかったんだ」と悲嘆に暮れていた。彼はその場に閉じ込められてしまったのである。彼は父に、彼を含めてその場にいる三〇人の人たちが何をすべきかについて、消防署に問い合わせしてほしいと訴えた。父はある人から情報を受けて、「低く屈むように。消防員たちがいま上へ向かっている」と伝えた。その言葉を聞いて、息子



は周りの人たちにこう告げた。「消防員たちがいま上へ向かっている。みんな地上に降りることができるぞ!」

\*\*\*

事態がますます悪化するなかで、八七階にいたキーフ・ブルイエット&ウッズ社の社員二〇人は、最後の数分間のあいだ、ニューヨーク州の税務署が所有する会議室に避難していた。エリック・ソープ氏は、やっとのことで妻のリンダさんと電話がつながった。彼女は近所のアパートで彼からの電話を待っていた。受話器の向こうで夫は、しかし無言であった。リンダ夫人が聞いたのは、周囲のノイズだけである。「私は息をのみながら、そこで起こっていたすべてのことを聞きました。『消火器はどこだ?』と誰かが尋ねると、別の人は『それは窓の外に放り投げてしまったんだ』と答えていた。『誰か意識不明の者はいるか?』と冷静に対応している人もいた。しかしある人は狂乱状態になって叫び声をあげていた。別の人は、夫に『大丈夫だよ。なんとかなるよ』とやさしい声をかけていました。」

南タワーの一〇五階では、旅客機が激突してから数分後に、窓拭きを仕事にするロコ・カマジ氏は、自宅の息子と妻に電話をかけていた。「私はいま一〇五階にいる。ここには二百人くらいの人々がいる。屋上の近くに集まっているんだ。」カマジ氏は屋上に通じるドアのカギを持っていたのだが、しかしそのカギのみでは、ドアは開かなかった。そこにあるブザーを二二階の警備室にいる防災員に押ししてもらわないかぎり、ドアは開かない仕組みになっていたのである。

一九九三年の二月に起きた世界貿易センターの地下爆破事件では、警察のヘリコプターによって、北タワーの屋上から人々が救出された。しかしポート・オーソリティーや消防局はその日の朝、ヘリコプターを用いた救援活動をしないことに決めたという。その決定は、ほんとうに正しい決断であったのだろうか。多くの人々はビルの中に閉じ込められたままであった。南タワーでは非常階段のAが下へ通じていた。だがそうした情報は、上部のフロアにいた人々には伝わっていなかったようである。キーフ・ブルイエット&ウッズ社のトレーダーであるフランク・ドイル氏は、妻に電話をかけて愛を確認した。「最上階まで来たんだけど、屋上にぬけるドアが開かないんだ。お願いだから911(緊急電話)に通報して、私たちは閉じ込められてしまったのだと伝えておくれ。」

最上階の一〇五階は、屋上を目指して集まった人々でごった返していた。シーン・ルーニー氏は妻のベヴァリーに電話をした。二人はバッファローの高校で、十六歳のときにダンス・パーティーで知り合った。そしてお互い、ちょうど五〇歳になっていた。はじめルーニー氏はビルの階段を下ったが、障害物に行く手を阻まれたので、上へ向かって最上階にたどり着いた。屋上に出ることができなかつたので、今度はまた下に戻ることにした。妻のベヴァリーさんは電話で彼を勇気づけて、「あなたの周りに炎なんかどこにもない」と言いつづけた。しかし彼は「窓が熱いんだ」と息を切らしながら答えた。天井が剥がれ、床が崩れ落

ちる中で、二人は最期の別れを告げた。「彼は私に愛していると言った。それから、大きな爆音がした。」

九時五九分、第二の攻撃を受けた南タワーが、最初に崩壊する。

\*\*\*

北タワーの九二階では、ジェフリー・ヌスバウム氏が母のアーリンに電話をしていた。「爆発はどんな具合だった？」北タワーにいた彼は、五〇メートル先の爆音について、三〇キロも離れたところでテレビの映像を見ている母に、こう質問しなければならなかった。母は、「南タワーが崩壊したのだ」と答えると、息子は「何てことだ。愛しているよ」と告げて、電話は切れてしまった。

北タワーの崩壊は、すでに時間の問題であった。北タワーの非常階段はどれもビルの中央に集中しており、それらはすべて、旅客機の衝突によって塞がれてしまった。九一階より上層のフロアには、一、三四四人が閉じ込められていた。窓から飛び降りる人の数は、南タワーが崩壊すると急に増え始めている。

九二階にあるカール・フューチャー社のオフィスでは、その日の朝、六八人の社員がすでに働いていた。朝八時からの特別会議には、二〇人のブローカーたちが出席していた。北タワーに旅客機が突っ込んで、ビル全体が自動車のアンテナのように揺れ始めたとき、その会議室のドアはよじれて、多くの人々が中に閉じ込められてしまった。約四〇名の他の社員たちは、フロアの西側にある広いスペースに避難した。そのうち三人が家族に電話をしたことが確認されている。カール・フューチャー社は、機体が激突した階の、ちょうど下の二つのフロアを占めていた。激突によって亡くなった人こそいなかったが、それでも社員たちはだれ一人生還することができなかった。一〇時五分から二〇分間のあいだに、火は九二階の避難場所にまで及んだのである。

一〇時一八分、特別会議の企画者の一人、トム・マクギニス氏は、妻のイリアナさんに電話が通じた。「事態は本当に本当に悪い」と夫のトムが言うと、妻のイリアナさんは、「そうよ、これは、この国にとっても最悪、第三次世界大戦のようだよ」と答えた。「あなたは大丈夫なの？イエス・ノーで答えて！」と彼女が言う。「私たちは九二階の会議室にいて、ここから出られないんだ」、と夫は答えた。「ほかに誰といっしょにいるの？」——「ジェイ・ホルランド、ブレダン・ドラン、そして、エルキン・ユエン。」

「愛しているよ。娘のケイトリンを大切にね。」夫は妻に、こう告げた。妻のイリアナさんは、最期の別れの言葉を聞くなどとは、思いもよらなかった。「しっかり、気を落ち着けて。あなたたちは、たくましくて機知に富んでいるのだから、そこから何とか脱出できるわ。」——「いや、君は分かっているようだが、上の階では人が飛び降りているんだよ。」

一〇時二五分のことであった。九二階の西側に火の手が達すると、人びとは窓から飛び降りはじめた。マクギニス氏は、ふたたび、妻と娘に別れを告げた。妻は「どうか電話を切ら

ないで！」と言ったが、「私はいまから、このフロアを下に降りなければならない。」夫はこう述べて、電話は切れた。一〇時二六分、北タワーが崩壊する二分前のことであった。

ここに犠牲者の冥福をお祈りします。合掌。

参考文献：“Fighting to Live as the Towers Died,” in *New York Times*, 2002/5/26.